

注解『七十一番職人歌合』稿(九)

下 房 俊 一

凡例

一、本稿には、『七十一番職人歌合』の中、第二十一番および第二十二番の注解を収めた。

二十一番 草履作 硫磺帚売

【職人尽】

〔調度歌合〕九番右 うらなし かぢをたえ鼻緒切れぬと知らせばや舟さし寄するうらなしにして 左は……、右は禊子内親王の家の宣旨作り出だし出でたる物語のしりを思ひよそへられたるさま、ともにいうに聞こえ侍り。……鼻緒切れぬとあるも、鼻欠け牛の心地すなんと難し申す人々あるによりて、持と定め侍る。〔吾吟我集〕帚 塵をよく取りぬる徳をいふならば是も琥珀の玉ははきかな 〔古今夷曲集〕職人歌合の中に 吾が恋は一つもあはぬ足拍子木履かたかた草履かたかたへ民部少輔嘉隆 〔長崎一見 職人一首〕十三番右 雪踏屋 花を踏んでいとど心はせきだ屋が詠む歌までも腰折れとなる ……右は、また竹の皮のせばき心に而花を踏む事、其のおそれあり。かやうの思はれ侍る。

〔後撰夷曲集〕草履 奈良草履その手際見て買ふならばともかくにも捻ぢ鼻緒哉へ貞林 或る方より雨夜に帰る折から、下部どものねぶり居ければ、みづから下踏尋ぬとて、縁の隈々見けるに、尋ぬるはなくて、古草履多きを

注解『七十一番職人歌合』稿(九)

見て詠める 二つ緒の杉の足駄を尋ねずは古皮草履ありと見ましや〈言千〉〔銀葉夷歌集〕笠張恋 辻中で見初めし君はからかさの骨身にしめる思ひなりけり〈貞林〉笠張の身の上ながら君恋ふる泪の雨は防ぎかね候〈方碩〉〔人倫訓蒙図彙〕草履や 中抜、金剛、悲田寺等、此の所に売るを、鼻緒をたて、品をつくらひて是を商ふ、所々にあり。

／ 雪踏師 西洞院二条の下に住す。其の外所々にあり。／ 尻切師 裏付けといふ藁の藁をもつて作り、革の縁をつけ、又は絹の表をもつくる也。女の具なり。／ 雪駄直 編み笠着て、箱一つ脇にかけたなり。直しかかり尻据ゆるとひとしく、火をもらいませふとたばこをのむ。これ定まりの風俗なり。〔誹諧職人尽〕草履作・ゆわう箒売 華踏むも生の裏無し草履哉〈長治〉 時雨降る奈良や草履の裏表〈祇口〉 足軽の声も長閑や江戸草履〈蓼和〉 捨得は箒なりけり寒牡丹〈貞佐〉 其の積もる初雪買はむ箒売〈氷花〉 水木辰之助に初参会の時挨拶 煤掃きや諸人が真似る鐘踊り〈其角〉 木枯らしや老いを養ふ箒売〈小田原 花外〉 秋の田のおもかけ売るやみごははき〈長孝〉 元日をゆわう箒の朝寝かな〈蓼和〉 〔今様職人尽百人一首〕ほうき師 柄もすげてしゆるそろふけばとけやらぬねまきてほうきまきしまいける 「きつふ眠たそうな。夕べ気か」 「いや夕べは蚤に泣かされた」 「蚤に泣かされてはこに乗つてか」 ／ つげぎ師 なかせつつ付木や猿の真似をつく硫磺つけつつ藁束ねおく 「皆精を出しませう。明日は休みてござるぞ」 「おまつ、その藍蠟をくりや」 「此の硫磺はよい花じやの」 ／ せつた師 買ふ人を巻き緒の雪駄玉子なり履くや草緒の切り回しかな 「ほんに出来たやだの」 「ちあいがよい出来だ」 「青漆は鼻緒をしもふたかの」 〔職人尽狂歌合〕草履造 血を吐くは八千八声郭公まづ中抜きに一そくも鳴け 左、八千八声鳴くとならば、かつくもばかり鳴けかしと申されし狂言、限りなくおかし。右、……草履造のしりへにこそ立たましか。／ 附木造 突く音とともにきよくと附木師の我が物顔に聞くほとゝぎす ……右、附木造、八島の大匠（左歌）のお前近く立ち出づるべきものにあらず。／ 附木造 附木突く人もつとめて今朝一把夏の木口にほとゝぎす聞く ……右、附木の火と続けられたる、おかしく侍り。一把と二羽の秀句利口に申されたる、味あり。左に勝ると申すべし。／ 附木造 造りなす附木の音の数ごとに鳴くやひとふた三月過鳥 ……左、続けざま安らかに聞こえてよしと申すべき中に、三月過鳥、あまりに事を好みたるさまにや。右勝ちて侍れば、高麗の乱声遅しやとこそ申すべけれ。／ つげ木造 附木

すり逆目に鉤かけたかと横に削げ行く初子規 ……右、三四の句、わりなうめづらしければ、左に勝りぬべくやと覚へ侍れど、初五文字の、附木すり、と体の語に取り成されし、聞きなれぬやうにも侍れば、しばらく持となして、勝負を定めず侍る。〔江戸職人歌合〕二十三番 付木売・箒売 灯火も消ちて月をや眺むらん今日は付木を買ふ人もなし月をめづる人の言葉や玉箒塵ばかりなる雲も残さず 左右共無申旨。判云、左の歌、其の職のために月のあかきを恨むる心ばへあり。不庶幾。右哥、玉箒とは何ばかりなる箒にかあらむ。竹箒草箒の分にては心奢りに似たり。持にて侍るべし。忘れん事も安付木消えて物思ふ我や何なる 園原や布施屋は誰も同じきをなど箒木のありか惑はず 右申云、無可難申一事。左申云、右歌、木を詠ずる歎。判云、左哥、げに無難なり。右歌、布施屋は誰も同じきをといへる、裏店などのいぶせき宿どちの有様をかしう侍るべし。下の句もけしうはあらず、すべてよき哥なるを、木を詠するに似たりと難申さるる条、そのいはれなきにあらず。右の哥傍題なるによりて、以左為勝。〔今様職人歌合〕草履造 玉の緒も緒ぶとも切るる思ひかな板金剛の心強さに 左、板金剛のうちつけにくどき寄れども、はきはきといらへせぬ心強さを恨み、……かれは足にかけ、これは口につく。尊卑の差別ありといへども恋に上下の隔てなければ、なずらへて持とす。「麻裏は此の頃の物ながら、後々も廃るまじくこそ思はるれ」 藁草履造り馴れたる手の豆を足に替へたる花の山踏み 草履造の手のひらの豆を蹴に替へて日毎踏み出だしたるは、痛くも花に心を入れたりと見えて、薙刀形には判じがたけれど、(古椀買の歌)……面白く覚ゆ。 我が恋の奴ぞ涙こぼさず造る草履はなかぬきなれど 天明のころの狂歌に、時鳥まだなかぬきの上草履と詠めり。かばかりの事をも難としてとかくいへるは、歌合のならひなればいかがあらん。右……勝つべし。 花七日造りし風のふく草履散らねばはくといふ人もなし 左、造りし風とはいかなる風をいふにかあらん。草履造の造るといふ字を強ひて言ひ入れんとての事にや。はくといふ秀句も尻きれて新らしくも見侍らず。吉野漆の古椀はげたれど少しは用立つべし。 柑子にも布にも替ふる幸ぞなき造る草履の藁すべや何 ……藁すべのみことにつくりたる歌は、初瀬の大悲者の幸は給はらずとも、判者は降をひきて柑子にも替へ、躍り立て駿馬にも替へんと思へり。 月の中の蛙をめでて藁沓のくつかたかたも造り得ぬかな 月中、蟾蜍雖似三緒太形、雪間玉兔不勝朱椀円。依以持一隻之藁沓、取一具之台子者也。

うかうかと月に見とれておのづから造る草履も丸尻にせり 左、月に見とれて作りたる丸尻は、秋の半ばの中抜と思はれて、作意の軽きもやうに履きよし。…此の歌合の相撲には一番寝ずはあるべからず。逢ふことはかたしの草履なかだちのいつこしらへて二人並べん 草履も古腕も、共に逢ひがたき恋の心の一對にて、欠けたる所なければ、持たるべし。手作りの恋の奴の持草履ふみ見る度に面白きかな 古腕の中末違ふ恨み、ふみ見る方よりも面白く聞こえ侍り。花見とて人の行き来のしげきには草履造りもせはしかりけり 左(草履造)の歌、いささか趣あり。勝にや。塵雲もなき三日月の鎌をもて草履の毛まで取れるさやけさ 並べたる恨みのたけの皮草履踏みつけものに妹はせしより 下屋舗守りつつ造る草履より花見の客の切れぬ門前 奇麗にも草履造りて取り捨つる塵のうき世に今は逃れし 柔らかな草履造りし身も今はへんくつつくる老いとなりなき 秋最中造る草履は片づけて塵なき空の月を見るかな 諸人は足を運べど居ながらに草履造りて花を眺めん 塵積むを惜しむ心に草履さへ造らで履かぬ花の白雪 散る花をはき造りたる草履には鼻緒も白く造りなさばや 我はただ恋の奴の持草履中抜なれど涙こぼるる すぎはひの草履は捨てておのが身の形をつくる恋もする哉 三節草月に照らして今宵また造る草履も秋の中抜 (近世職人尽絵詞) 附木造 鋸の一挽きは千里の一步也といへども、大材終ひに板と成り、鉋の一突きはももたびにして、百枚の附木と成る。共に深山を出でて其の用をなすや異也。木挽の鋸はごしぐと聞こえて獣の声をおこし、附木屋の鉋はびいぐと鳴て鳥の音を出だすも山中の趣にや。「鼻唄歌ひて、数なたがへそ」 (略画職人尽) 定家も知らぬ力や石割りの雪踏屋は世を渡る五斗米 (宝船桂帆柱) 雪駄傘屋 商ひは照り降りなしの金儲け両天秤のせつたからかさ 京橋本天満丁稻荷陣屋 ○仙女香

【本文】

廿一番

とかむへき人もあらしなけはき

くも井の月をのほりてやみむ

ひるなれや夜半の月ともいかゆわう

はききのちりもくもりなき哉

いけは(忠)(明)(類)あけ

くも井(類)雲井 みむ(尊)見む(明)(類)みん

ひる(類)昼 夜半(類)よは

ちり(類)塵 くもり(類)曇 哉(尊)(忠)かな

左哥、きぬかつき、御所持などは中く、蘭
けはさてをそれなきにこそ、さうりつくりの身のほともしらす、昇殿の思も

あはれなるへし。右、ひるなれやとて、よはともいかくゆわうは、きのちりもくもらぬなど、長くといひくたせる、優ならざるにあらず。同科にや。

くれことにさうりやめすといひなして
ひとのあたりにたちならず哉
わかこひとゆわうは、きのいつとなく
はなれぬ中とおもはましかは

左も右も、さる事ときこゆ。これ又勝
負なかるへし。

◇ さうりつくり

しやうり、く、
いたこんかうめせ。

◇ ゆわうは、さうり

ゆわうは、さうり
よきは、さか候。



きぬかつき―〔類〕衣かつき 中く―〔類〕中々 蘭
け―〔類〕あけ、
はさて―〔尊〕〔明〕〔類〕はきて〔白〕ばきて こそ
れ―〔類〕恐 さうりつくり―〔類〕草履作

あはれ―〔類〕哀
ゆわうは、きのちりもくもらぬ―〔類〕ゆわう箒の塵
も曇らぬ
長く―と―〔尊〕〔類〕長々と〔忠〕ナシ いひくたせる
―〔類〕言下せる

くれ―〔類〕暮

ひと―〔類〕人 たちならず―〔類〕立ならず 哉―

〔尊〕〔類〕かな

わかこひと―〔類〕我恋

はなれぬ―〔類〕離れぬ

さる事ときこゆ―〔類〕さること、聞ゆ これ―〔類〕
是

さうりつくり―〔白〕草履作〔忠〕廿番草履作

いたこんかう―〔明〕いたこんごう〔類〕いたこんごう

ゆわうは、さうり―〔白〕〔類〕硫磺箒売〔忠〕ゆほうは硫磺箒売

【語注】

◎草履作は、藁や藁で草履を作る職人。

硫磺箒について、吉田光邦『日本技術史研究』は、「火を移す付木として、硫黄をしませた、硫黄箒が用いられたのである」（伝統、二、一、七十一番歌合「図私解」とし、『日本国語大辞典』は、硫磺箒とは「（その形が箒に似ているところから）硫黄木を数多く束ねたもの」（「硫黄箒」の項）であるとする。『日本職人辞典』（「硫黄箒売」の項）もこれを踏襲するが、画中の売り声に、「よき箒が候ふ」とあるから、硫磺箒イコール硫磺木（付木）と考えるのは無理なように思われる。遠藤元男『日本の職人』は、「室町時代には硫黄草でつくった硫黄箒を売り歩く硫黄箒売りがいた」（「箒師」の項）とし、同『日本職人史序説』（七章、一一、二、箒師）も同趣旨のことを繰り返しているが、最近出た、同『ヴィジュアル史料 日本職人史』^[1]（84・88、硫黄箒売）では、次の山本説に従っている。山本唯一『中世職人語彙の研究』は、硫磺箒売が手にもっているのは、硫磺木と荒神箒であるとし、ともに火竈に関係するものであるから一緒に持ち歩き売っていた、とする（「硫磺箒売」の項）。実はこの説は、夙に嬉遊笑覧に、「職人尽に硫黄箒売あり。燭奴ツクヌとははきとを売るものなり」（十下「発燭」の項）とし、守貞漫稿（「附木屋」の項）も、同趣旨を記すところである。結局のところ、山本氏の言うごとく、絵から判断する限り、硫磺木と箒を売り歩いたとするのが、穩当かと思われるが、そういう商人がいたという確証がない上に、「硫磺箒売」という職名のみならず、月、恋の歌や、画中の売り言葉でも、「硫磺箒」と一続きに言っている点に、やや不安が残る。

なお、山本氏のごとく考えた場合、硫磺木（付木）の方は、厳密には、付竹とした方がよいのではなからうか。古くは、『源平盛衰記』十六に、「速カニ登山シテ、堂舎仏閣悉ク魔滅ノ煙トナサバヤト、大悪心ヲ発シ、燧ヒラキ付ケ茸シヅラヒ硫黄ナド用意シテ、燧袋ニシツラヒ入レ」とあり、近くは、「笈の肩箱よりも、ひうちつけだけ取り出だし、ちやうちやうと打ちつけ、御判とお請けの判どもを、刹那に焼て捨てたりしは」（幸若、清重）「やがて火打袋より、硫黄つけだけ取り出し、もとのごとくに火をとぼし」（御伽草子、あきみち）、「螢火を先づつけたけの朽木哉〈政昌〉」

(毛吹草、五)や、『嬉遊笑覧』十下に引く、宗因の俳諧、「たばこのむかと火打つつけ竹／さびしさは同じ借屋のとなりどの」などのごとく、江戸時代初期までの文献に「付竹」の用例が見える。一方、「付木」の例は、言繼卿記の「従大宅郷柴二荷上候了。わり木大二束到、つけ木六束如例年」(天文二年十二月二十九日条)が早い方であろう。中世から近世にかけてのころ、付竹が次第に付木に取って代わられたのではなからうか。このことについては、『多波礼草』一の、「いつの時にかりけん、材木の費へを厭ひ、乗り物の積細まりし時、昔はささら竹に硫黄をつけ、これをつけだけといひしに、今の世、檜の木を用ふる、いかがなりと、ござかしき人のいへるにより、さらばとて、つけ竹に改まりけれど、ほどなくて止みてけり」および、この記事を引く『嬉遊笑覧』十下の「按ずるに、杉檜の器などの議ありしことは、元禄二年巳の九月なれば、其の頃の事か」が、参考にならう。絵で、箒とともに売り歩いているのは、竹製品のように見えなくもない。もし、付竹だとすると、箒との関係も理解しやすしい。

草履作との関係は、硫磺箒売が箒をも売ったとするならば、両者とも原料に藁を用いることがあつたからであろうか。ともに、職人歌合に初出。

◎とかむへき人もあらしな (第三句以下の行為をしたからといって) 咎めだてする人もいないだろうな。この表現には、常識的に考えれば当然咎められるべきところだ、という前提がある。にもかかわらず、しかじかの理由で、咎められないであろう、というのである。では、何を咎められ、または咎められないのか。次の二つが考えられる。一つは、草履作が参内すること自体である。それは、当然咎められるべき行為であるが、月を愛でる心に免じてほしい、というのであろう。いま一つは、藪くさげげを履いいて参内することである。やや時代が下るが、ロドリゲスの『日本教会史』によれば、当時の日本では、草履や足駄を履いたままで、身分の高い人と会つたり、その前を通り過ぎることは非礼とされていた。そういう場合は、履物を脱ぐか、または半分まで脱ぐか、少なくとも、脱ぐこととする態度を示さなければならなかつた。その上、「細い藪くさで織ユスライつた表ウエに、革底のついたもの」は、「宗教にたずさわる者」の履物であり、「太閤の時代」より前は、庶民は足半やなという、足の前半だけが載る藁草履を履いていた、という(以上、〔参考〕参照)。このことは、絵巻などに徴しても、十分納得がいく。室町時代においては、庶民の

素足も少しも珍しくなかつたのである。そういう時代にあつて、藁草履ならぬ藪げげを履いて貴人に近づくことが、いかに非礼とされたか、容易に想像できる。ここは、そういう常識を前提とした上で、にもかかわらず、草履作が藪げげを履いて参内することが許されるであらう、と云うのである。そのわけは、言うまでもなく、藪げげが他ならぬ草履作の製品であるからである。

◎いげげ 「藪げげ」で、藪のげげ、すなわち藪で作つた草履であらうと思われるが、諸辞書に引く、「御杵役、御輿の左の方より廻りて、御いげげをめさせ申す」（鎌倉殿中以下年中行事、正月二三日）以外に用例を見出せず、詳細は不明。『貞丈雜記』八に、「緒太と云ふは藪の草履也。常の如くの紙緒のざうりの緒を太くしたる也。……緒太をゐのげぎとも、裏なしとも、藪金剛とも、藪履とも云ふ也。女のはくは緒細き也」、『安齋隨筆』七に、「ワラのげぎと云ふは、常のワラザウリなり。井のげぎと云ふは、藪ガラにて作りたるザウリなり。藪ガラは、燈心を引き取りたる跡のからなり」と云う。『日本常民生活絵引』によれば、『法然上人絵伝』（四十八巻伝）巻六、第三回、法然の吉水の庵に聴聞に訪れる二人の衣被きの女が履いている大型の草履が、藪げげであるという。（同様の草履は、巻十、第一回にも描かれる。これも、衣被きの女二人。）いずれにしても、藁の草履よりもずっと高級な草履であつたと考えてよからう。

◎くも井の月をのほりてやみむ 「雲井（雲居）」に、空と宮中の両義をかける。宮中に照る月を、参内して見ようか。

◎ひるなれや （こんなに明るいの）昼だからであらうか。昼と見紛うばかりに、月が明るく照っているのである。この種の発想は、「昼なれや見ぞ紛へつる月影をけふとやいはむきのふとやいはん（躬恒）」（後撰和歌集十五、雑一）を始め、伝統的な歌に少なくない。

◎夜半の月ともいか、ゆわう （こんな明るい月を）夜半の月と、どうして言えよう。「言はう」に「硫磺」を掛け、「硫磺箒」と下句に続ける。

◎は、きのちりもくもりなき哉 「箒」の縁で「塵」という言葉を出し、「塵も曇りなき」と続ける。「塵も」は、

少しも、全く。月に、一点の曇りもないことだ。

◎きぬかつき 「衣被き」で、外出などの際に、頭から単衣の小袖を被って、顔を隠した女。ここでは、「六位の外記康綱、衣被きの女房をかたらひて、かの宣命を持たせて、忍びやかに奉らせけり」（徒然草、百一）や、「（為世卿）内裏にて節会の衣被きを御けさう候ひけるを、此の女房あらけなくつき倒し申して」（和歌所へ不審条々）に見えるような、宮中の女房を指すものと思われる。

◎御所持 宮中や院の御所などに仕える侍。

◎中く、蘭げ、はさてをそれなきにこそ 「はさて」は、尊経閣本、忠寄本、明暦板本、類従本は「はきて」、白石本は「ばきて」。「はきて」の誤写であろう。衣被きや御所持などであれば、確かに、蘭げを履くことは恐れないことだが、の意か。

◎さうりつくりの身のほともしらす、昇殿の思もあはれなるへし 草履作が身の程も弁えず、ひたすら昇殿したいと願う心意気は、殊勝というべきである。

◎長くといひくたせる 忠寄本は「長く」とを脱す。「言ひ下す」は、「右歌は、言ひ下したるやうに亭主を祝へり、いかでか勝たざるべき」（文治二年歌合、祝十三番判詞）、「右歌、わくるも惜しきといひ、花の折しもなどいへる詞つづき、やすらかに言ひ下して宜しく聞こえ侍るにや」（千五百番歌合、二百二十番判詞）などに見るように、滞りなく、すらすらと言うこと。

◎優ならざるにあらず 「優」は、歌論用語で、繊細優美で伝統的な情趣を言うが、この判詞も面白がって言うに過ぎない。

◎同科 「おなじしな」と読む。「科」は「品」に同じで、歌論用語で、厳密には歌の品格、等級のことであるが、ここは、同じ程度の歌がらだというほどの意味。「歌のしなの同じほだなれば、持にぞ定め申す」（天徳四年内裏歌合、十一番判詞）、「歌のほど同科なり。これも持と申すべし」（中宮亮重家朝臣家歌合、雪三番判詞）、「左右同科歎」（千五百番歌合、九十三番判詞）など、歌合判詞でよく用いられる表現。

◎くれことに 暮れごとに相手の家の辺りに立ちならず、というに過ぎず、草履作が、特に夕暮時に売り歩いたというわけではなからう。

◎いひなして 「言ひなす」は、事実でないことを事実であるかのように言いこしらえること。「後の世を嘆く涙と言ひなしてしほりやせまし墨染めの袖へ重家」(新古今集十二、恋二)など、歌にも用いられる言葉。ここは、「草履や召す」という売り声を口実にする意である。

◎ひとのあたりにたちならず哉 「たちならず」は、「立ち平す」、または「立ち馴らす」。前者は、ある場所に度々立って、踏み固めて平らにすることを原義とし、転じて、ある場所を度々おとずれること。万葉集に、「勝鹿の真間の井見れば立ち平し水汲ましけむ手見奈し思ほゆへ高橋連虫鷹」(九、挽歌)などの例がある。後者は、いつも同じ場所に立って、そこを馴染みとすることで、「小倉山峰立ち馴らし鳴く鹿の経にけむ秋を知る人ぞなきへ貫之」(古今集、十、物名)などの例がある。ただし、この古今集の歌については、「立ち平す」と解すべきだとの説もあり、「立ち平す」、「立ち馴らす」両者の差は微妙である。むしろ、もともと前者の意味であった「たちならず」が、後者の意味に解されるようになったと見るのが自然であろう。いずれにしても、ここは、相手を慕ってその家の辺りに暮れごとにいつも立つ、というのである。

◎わかこひとゆわうは、きの 「わかこひとゆわう」は、「我が恋と言はう」で、今のこの心境をこそ我が恋と名づけよう、の意か。やや、意味が取りにくい。「ゆわう」に「硫磺」を掛け、「硫磺箒」と続ける。「硫磺箒」を、硫磺(付竹)と箒で、同じ商人が売り歩いてきたのだと解するならば、ここは、硫磺と箒とがいつも一緒にあるように、と第四句の「離れぬ中」に続く。なお、「こひ」の「ひ」は、「火」に通じ、「硫磺」の縁語。

◎いつとなく いつまでもずっと。

◎はなれぬ中とおもはましかは 二人が離れない中と思うことができるならば(どんなによいだろう)、の意。実際には、相手がつれなくて、今でさえも途絶えがちなのである。

◎しやうり 「じやうり」は、「ざうり」の転。時代が下るが、『日葡辞書』に、「Zori 一般には Ioriと言ふ」(邦

訳日葡辞書）、『かた言』に、「草履をじやうり、いやしきといふ人あれども、少しもくるしからず」とあり、俗語的な言い方と考えられていたようである。地方の方言のような感じもあつたのかも知れない。

◎いたこんかう 「板金剛」で、裏に板を打付けた金剛草履か。『守貞漫稿』に、本職人歌合三十番左、立君の履いているのが板金剛である（「草履」の項）という。そうとすると、絵の草履作が手にしている中、長方形の草履（二種）が、それに当たろうか。

◎よきはゝきか候 よい筈がありますよ。

【絵】

草履作は、塗り笠を被り、覆面をし、僧衣を着て、草履を履く。右手に、草履三足を持つ。白石本、忠寄本は、売り物の草履の種類を異にする。

硫磺箒売も、笠を被り、覆面をし、僧衣を着て、草履を履く。右手に持つのが硫磺（付竹）二束、左手に持つのが硫磺二束と箒二本か。白石本、忠寄本、明暦板本、類従本は、右手の硫磺らしき物は一束。東博本は、硫磺らしき物の中、左手に持つ方は、綴じ紐を描き落とすが、他の諸本はすべて描く。なお、吉田光邦『日本技術史研究』は、「売手は女性のようなのである」（伝統、二、一、七十一番歌合 図私解）とするが、この点未考。

【参考】

○ 大日堂の春の夕暮

花見んとこんがうかいにまづ行きて

（竹馬狂吟集）

○この王国の普通の履物は、稲の藁で編んだ草履アルバルカであつて、先の方に緒が付いていて、足の親指の間にそれをさむ。庶民が道を行き、武士が戦に出るのには、足の前半分だけがのり、残り半分の踵の部分は外に出る一種の草履を用いていた。これは足半axinacaと呼ばれるが、足半分という意味である。この履物は、われわれが日本に行つ

たころまで用いられていた。そののち、太閤トウカウの時代からは、竹の皮で作られ、またすでに述べたように、藁で作られるものも、足の裏全体がのるようになって、改良されてきた。この草履が日本固有の自然な履物である。宗教にたずさわる者のためには、それよりも良くて大きな別の草履があった。それは細い藁で織った表エスナイラに、革底のついたものである。また、泥道を行くとか雨天の折とかには、足駄シラボを使う。それらはすべて、すでに述べた緒を足の親指の間にはさんではく。……日本人は足にはく物、すなわち草履や足駄にいくつかの礼法を設けてきた。すなわち、草履をはいている者が身分のある人か同等の人かの前を通るのには、草履をはいたままで通りすぎることはできないし、また足駄をはいている時相手がいなければならない、相手と同じように草履とはきかえねば話を交わすこともできないし、もし身分が低くて足駄をはいている場合には、足駄をぬいで、相手が通りすぎるまで地面に素足で立っているか、あるいは素足で通りすぎるかしなければならぬのである。尊敬すべき人たちが坐っている時、その前を通る者が身分ある人であれば、草履をぬぎたいという態度を示して挨拶する。すると、そこにいる人たちは、どうぞ草履をはいたままお通り下さいと相手にいって、通りすぎる間立っている。もしも馬に乗っている場合は、馬から下り、しばらく歩いてから、再び馬に乗る。身分の低い者が通る場合は、相手に話しかけもしないで、草履をぬぎ、通り抜ける間、敬意のしるしとして少し身体を前にかがめて、素足で通りすぎる。そのことから、われわれが頭巾グツチをぬぐように、日本人は敬礼のしるしとしてたがい草履をぬぐと、誤って書いた者が幾人かいる。なぜならば身分の高い人々の間では、このようなことはしないからである。身分の低い者とか下々の召使とかが、立っている高貴な人と話をする場合は、話している間、草履をぬぐか、足の半分まで草履をぬぐかする。もしも、きわめて高貴な人との場合には、ひざまずいて伝言を申しあげる。それよりいくらか下の人であれば、身体を少しかがめる程度にする。

(日本教会史、一卷十六章)

○足駄シツボスをはいて行く時、身分の高い人が足駄をはかないで来るのに出会って、その人と話す場合には、自分の下男モウツに草履アハルカを持って来させて、話をしての間は足駄をぬいでそれにはきかえる。そして草履も持たず、泥のために足駄をぬぐことができないならば、足駄の鼻緒カクレシメから指、すなわち足の親指の割れ目はずす。それはあたかも、自分

が頭かぶが高いので御勘弁下さいといつて、下駄をぬぐのと同様のことである。この時は少し上体をかがめて話す。もし日よけの差傘を手している時には、その人と話している間、礼法として、それを少しく片方へよせる。

(同、一卷二十四章)

廿二番 傘張 足駄作

【職人尽】

〔吾吟我集〕寄履恋 君が方へ通ふ心の道を踏まば鉄かの足駄の齒もたまるまじ 〔訓蒙図彙〕傘工さんこう かさはり 〔長崎一見

職人一首〕十三番左 傘屋 傘張がが今日さし出でて見る花は天が下にはあらじとぞ思ふ 左、天が下にはあらじとは、傘の広過ぎたる作意也。……かやうの思おもはれ侍る。〔人倫訓蒙図彙〕笠張 唐土もろこしより伝はれりと。或る説に、日本にて

は田村丸のうちに尊重と云ふ者是を作るとあれ共、確かならず。今傘紙は、森下、国栖、海田等にて張る也。又、日隠しのために絵をかきたる笠、小児のもてあそびとなす。所々に是を作る。〔用明天王職人鑑 職人づくし〕桶屋が妻の寝心も、よしや濡らしてきぬぎぬに、ほしてまだひぬから笠屋、さして降らねどもみぢ葉も、しぐれの雲に染物屋……

〔華紅葉〕寄傘恋 思へどもそれとさされぬ破れ笠の骨ばかりにぞやつれぬる哉〔我胸〕 〔狂歌活玉集〕寄傘無常 傘も破れた後は人に似て骨のふしふしあらはれにけり 寄傘恋 雨の夜も雪の降る夜も小町風濡れて骨身をやつす傘

〔誹諧職人尽〕傘張・あしだ作り からかさはただゑかがみの今朝の春〔守武〕 五月雨はただ傘を晴れ間哉〔正甫〕 傘張の眠り胡蝶の宿り哉〔重五〕 白雨に傘借る家やま一町〔圃水〕 傘張りや菜の花に迄よい日和〔夏人〕 から

かさの空を忘れて花の春〔木牛〕 傘張の蛇の目をまはす師走哉〔水府 沾鱗〕 傘張やかがりも錦冬紅葉〔常州真壁 秀鷗〕 傘張はすほめて仕廻ふ時雨哉〔小田原 華瀧〕 夕立や日の影盗むからかさ屋〔文尺〕 油引く傘の匂ひや

草いきれ〔鬼髪〕 傘に引く油もをのが暑さ哉〔祇明〕 傘張や時雨来る日の放下僧〔笠間 古淳〕 五月雨の雲かた

づくや日傘張り〔蓼和〕 馬下駄や引くとも上らず厚氷〔常矩〕 五月雨は浪の緒すげし足駄哉〔長治〕 足駄履く僧

も見えたり花の雨〈翁〉 梅咲くや一度は雪踏二度は下駄〈我兄〉 雪解けや都に出づる下駄の跡〈沾徳〉 卯月からぬからぬ顔や下駄作り〈志友〉 棹鹿のよるべやかねか足駄にも〈寥和〉 「今様職人尽百人一首」からかさ屋 張りもかもさす人にせんからかさの糊も油の渋ならひくに 「これは轆轤巻きはあやすきかけか」「おかんは稽古に行つたかな」「ああ、晩はあきの山の会で行きました」 足駄師 日和降り止まぬさつき長降り降る雨寒く足駄売るなり「銀杏歯はどこに誂へだ」「それは又兵衛が請け取つて来た」〔彩画職人部類〕傘 博物志三、魏、神元帝始テ為ル傘。古今集 み待いみ笠と申せ宮城野の木の下露は雨にまされり 文禄三年、泉州堺の商人納屋助左衛門といふ者、呂宋より帰りに来たれり。其の時、傘、蠟燭をのをの千挺づつを獻す。今用ゆるところの傘是なりとぞ。〔職人尽発句合〕九番右 傘張 我がためによき潤ひや春の雨 傘張がのをが手業のさせほせいふもおかしければ、持にこそ定め侍らめ。 四十二番右 足駄作 塗り下駄の色美しやかきつばた こなたは、一むら雨の晴れたる池の杜若に、下駄引きありくたをやめが顔よ、花の風情もあるべし。〔職人尽狂歌合〕傘張 父に似ぬ名告り高しと傘張が心の闇に聞く郭公 左、郭公の名告りする事は、千載集に師時卿も詠ませ給ひき。さるを、なにがし法橋が故事によそへ、兼輔朝臣の、子を思ふ道の闇をさへ取り出でられし心詞、比類あるべうもおほえず、被甘心て侍り。右、附木造、八島の大匠のお前近く立ち出づるべきものにあらず。「八日に誂へし人の、十二日には取りに来んとたまひき」 傘張 五月雨の晴れ間と聞けば傘も張り上げて鳴け山郭公 左、よろしく聞こえて侍り。但し、張り上げてなど、大方たれたれも詠み出づるべき詞にや。右……左に勝ると申すべし。 傘張 張り替への傘張りかけて郭公新らしく聞く去年の古声 左、張り替への傘と置きて、古声と続けられし、いといたくみなり。……しばらく持となして、勝負を定めず侍り。 傘張 忍び音は傘張も爪折りの耳をすばめて聞く郭公 左、爪折りの傘、おかしく取り出でられたり。すばむといふ詞、俗語のやうながら、方丈記などにも見へたれば、あしからず。……勝の字は左に記すべくや。 足駄造 中空へ指を差齒の足駄売雨にね上げて鳴く郭公 ……右、日ごろの雨に値をつるさま、さも侍りなん。但し、四の句いささかつまりたるやうに侍れば、草履造のしりへにこそ立たましか。 傘張・足駄造 此のやうに鳴け郭公傘張の書く番附も八千八声 難波瀉あしだ造は時鳥かけたと鳴くをかたはかと聞く 左、番傘といふ物のしるしを、

郭公の声にかけて申されし、よろし。右、難波江の片葉の声を足駄の齒の落ちたるによそへられし、興あり。左もよろしけれど、右いささか勝りぬべくや。／傘張・足駄造 助六が傘張も聞く郭公花散る里に時を江戸節 それかかると二の足を踏むばかりなり造れる下駄の初子規 左、いとゆほひかにて、海を隔てて安房上総も絵にかきたらんやうに見渡さるる風情あれば、此の君ならばといふ人も待るべけれど、哥舞妓のさまなど庶幾せざるは、例の僻みくすみたる判者なればなるべし。右、忍び音のおぼろなるさま、よくとりなされたれば、勝つべきにや。〔今様職人尽歌合〕古傘買いかにして涙の雨をしがまし逢ふにはかへてくれぬ古傘 ……古傘の涙雨片身がはりの袖の上も、左の方（花売）や勝り侍らむ 「いたく破れぬ。帯は獣肉売る家にこそ売りぬべき」／させることなきなりはひに骨ぞ折る世にふる傘の用立たぬ身は 左の歌は……右は、右京大夫の六帖の題に詠せし番傘の古きを求めて、夜々百目の肉に油紙の紙屑を売らん事を思ふ。左は、由緒ある詞に花を飾り、右は、作意ある詞に骨を折りたり。傘に桜を折り添へて、至極風流なる坊主持ちとも申さん。／古傘を買ふとする身の中々に骨の折れたる世渡りにして 左は……右は、古傘の破損の紙、夜の風の骨を求めて世間に走る渡世の辛苦、似たりといへども、詠歌の勝劣同じからず。左（花売）勝ると申すべきにや／骨を折る身の世渡りに唐傘のさせることなく老いにける哉 ……右の歌、廿一番の歌に、心も詞も大方似て侍れども、これは懐旧めきて聞こゆるにや。花売の方、商ひ少し勝るべきか。／古骨に桜の枝をかざし行けば花笠売ると人や見るらむ ……花笠さし添へたる風情、可然歎。／花曇り傘持つ人をあてにして古骨買ひに出る桜時／さして世に用ひず年を古傘の油けのなき老いとなりけり／恋いのるしも見えず年月をあだに古骨折り古傘／運もいつ聞く時なしと年月をふる傘買ひて身をすぼめつつ／古傘を開きてみれば破れよりはるかに見ゆる月のさやけさ／買ひ出してみれば桜のこぼれけり春の花見にさした日傘か／買ひて得し古傘の蛇の目よりおとしとみる花の白雲／花曇り古傘買ふと心あてに桜のもとをさしてこそ行け／花の雪ふる唐傘は踏みつけて買ひかぶるべきことはあらしな／古傘のすぼめたる気をひきかへて運も開ける時を待つ哉／さればとて雨にも濡れず破れ傘宿にぞねぶる鮎に替へ来て／足駄齒入 下駄の齒を入るる我さへ咲く花の雪解するをば願はざりけり 左、花に心を入れたる齒入よろし。……左右同じ辻商売ながら、鍋の錆掛ずつしり買目ありて見ゆ。〔御足駄繕

ひて候。いざいざ履かせ給へ」／ なりはひの足駄のみかは我が口に齒も入るるまで老い朽ちにけり 左、老人のま
 んじりせる述懐さることながら、……（鍋鑄掛）ひとつ長屋ながら、隣よりは身体よろしげなり。／ なりはひの足
 駄の齒よりこのごろは花に心を入れてこそ見れ 左右、営みに心をしめられし感気、少なからず侍り。持にてや侍らん。
 ／ 笛にせぬ妹が足駄の齒を入れて心に秋の鹿ぞ寄り来る 左、秋の鹿とは恋すといふなぞなぞにや。右……勝つべ
 し。／ 書き送るふみ返されしつれなさに君が足駄の齒をや入れまし 花咲けば下駄の齒入もなりはひを忘れて
 雨の降るは厭ひつ 雪と降る花を眺めて酒酌めば下駄の齒入も泥となりけり 照る月に浮かれ出でなば夜更け
 んと下駄の齒入も二の足を踏む 雨晴れて雲足速き古足駄山のはさして月や入るらん はずかしくと忍ぶ足駄の
 齒も抜けてはいれの門をはひりかねけり 巡り会ひて詞をちよつとかけ足駄はいれとさへも呼ばぬつれなさ
 楔もて締むれど花の雪の日は下駄の齒の根の合はぬやう也 おのが齒の抜くるも知らでいつ迄か人の足駄の齒を入
 れにける 入れ齒さへ工合違ひの古足駄履き減りのする老いが身ぞうき 老いぬれば木目も分かで苦しきよ入
 るる足駄の齒の欠けしより 営みの足駄はおきて我が前齒揺るぎて今は入れ替へにけり すぎはひをしかぬる
 までに老い朽ちて入れ齒もならぬ古足駄かな 思はずよ親の譲りの手をさげて人の足駄の齒を入れんとは 足
 駄にも念を入れてぞ齒を入るるこれも世を行く道と思へば 食ひかねし老いも足駄の齒を入れて命をつなぐ営みや
 せん 朽るほど五月の雨のふる足駄入れ齒に泥の食ひ滲みる也 下駄の齒を入るる身ながら咲く花の雪と散る
 をば厭ふなりけり〔近世職人尽絵詞〕傘提灯屋 相撲は晴天にありて、灯し油売りありく頃は、打出しの太鼓となれれ
 ば、傘に因み無く、挑灯にえにし無し。されども大黒傘と慳貧屋の挑灯とは、骨の太きをもて角力取りにもたぐふべく
 や。〔略画職人尽〕夕づく日移らふ色の蒿の紋西へ傾く紅葉傘張〔宝船桂帆柱〕傘張 大切に家業守れば福の神大黒傘
 を春の豊さ 「膝は念を入れて下さい」 木履屋 鳳凰も出づべき御代の長閑さにさかゆる桐の下駄や賑ふ 「ま
 るまさの利休下駄、随分念を入れてさし上げます」 雪駄傘屋 商ひは照り降りなしの金儲け両天秤のせつたから
 かさ 京橋本天満丁稻荷陣屋 ○仙女香〔難波職人歌合〕下十一番 傘屋・下駄屋 露ばかり人は濡らさぬ手業にも
 涙の雨にさす傘はなし 右の方人云、是は隠れたる所なければ、べちに申すむねなし。 いかにせむ砕く心は板香の足

たたぬまで深き恋路を 左のかたうどいはく、古く板金剛の名はあれども、板沓は聞き及ばず。右方答、わらうづは藁沓なり。したうづは下沓なり。それらに唯同じ事なるをや。判に云、左の歌、一渡りよく整ひて、云ふべきことなし。右の歌、痛を板に云ひかけて、さて足たたぬまで泥の深きに恋路をかねられたる口つき、一渡りならず聞こゆれば、勝とす。

【本文】

廿二番

けにふらは又もきせなんそのほとは
あまけの月のかさぬかせはや

山かせのおちくるつゆのふるあした
かたはのつきは木の間なりけり

左は、月にむかひて雨気をよめり。哥合の

故実なきにや。うたさまはよろし。右は、心
詞よくかなへり。木のまの月のかた葉も
みる心地す。可勝也。

いつしかにわれにみえしとかくれかさ
さしもへたてぬころなりしを

ひとりねの身はわれなれやさしあした
ふため三めもあれはこそあれ

左は、哥さまゆうくとときこゆ。右は、逸興
あり。第三句大事なるへきを、さしあしと

注解『七十一番職人歌台』稿(九)

きせなん―〔尊〕きせなむ

かさ―〔類〕笠

山かせ―〔類〕山風 おちくる―〔類〕落くる つゆ―〔尊〕

〔類〕露 ふるあした―〔類〕古あした

つき―〔尊〕〔類〕月 木の間なりけり―〔類〕木のま成けり

うたさま―〔類〕哥さま

かた葉―〔明〕〔類〕かたは

われ―〔類〕我

ころ―〔類〕心

ひとりね―〔類〕独ね われ―〔類〕我

ふため三め―〔類〕二めみつめ

哥さま―〔類〕歌さま きこゆ―〔類〕聞ゆ

さしあし―〔類〕さし足

つゝけたるもすてかたし。可為持。

かさはり

ゑのあふらか

たらぬ

けな。

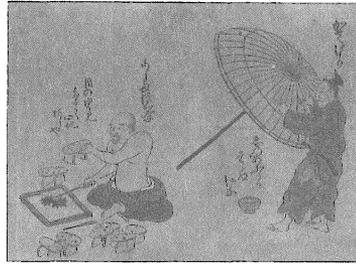
あしたつくり

目のゆかみ

たるから

心地

あしや



つゝけたる―〔類〕続けたる すてかたし―〔類〕捨かたし

かさはり―〔白〕傘張〔忠〕廿番傘張〔類〕傘張

ゑ―〔類〕え

あしたつくり―〔白〕履つくり〔忠〕履つくり

目―〔類〕め

たるから―〔白〕たかる〔忠〕たかる

【語注】

◎傘張は、紙を張つて差し傘（唐傘）を作る職人。ただし、歌では、「着す」、「脱がす」、「月の量」、「隠れ笠」という言葉を用いており、この点からすれば、むしろ、被り笠の方にふさわしい。「かさ」であれば、その種類は問題にしなかつたのであろう。なお、被り笠を作る笠縫は、別に、四十四番右に登場する。

足駄作は、足駄を作る職人。足駄は、今日いう下駄類の総称。ちなみに、「下駄」という語は、江戸時代になって、京坂地方中心に使われるようになった（国史大辞典「下駄」の項）。

傘と足駄とは、ともに雨天に関わる。両者とも、職人歌合に初出。

◎けにふらは又もきせなん はたして雨が降るならば、その時はまた改めて着せよう。

◎そのほとは それまでの間は。

◎あまけの月のかさぬかせはや 雨模様で、月が暈(筈)を着ているのであるが、今のところは実際に雨が降っているわけではないのだから、暈を脱がせて、奇麗な月を見たい、というのである。

◎山かせのおちくるつゆのふるあした 「山風の落ち来る」は、山風が吹き下ろしてくること。「風―落つ」という表現は、「秋の色は今に残らぬ梢より山風落つる宇治の川波」(秋篠月清集、冬部)、「そよ暮れぬ檜の木に風落ちて星出づる空の薄雲のかげへ定家」(玉葉集、十五、雑歌二)などの例がある。「山風の落ち来る露の降る」は、やや意味が取りにくいが、山風が吹き下ろして来て露が降りる、という意味であろう。風が露の原因だ、という発想は、「浅茅生の霧吹き結ぶ木枯に乱れてもなく虫の声かなへ但馬」(順集)、「荻の葉に露吹き結ぶ秋風も夕ぞわきて身にはしみける」(源氏、蜻蛉)などに例がある。「露―降る」という表現は、流布本系の和歌一字抄に載せる、「空を飛ぶ雁の翅の覆ひ羽のいづこ漏りてか露の降るらん」(和歌一字抄、下、新編国歌大観による、もと万葉集の歌、万葉集では、「露」は諸本とも「霜」に作る)や、「如何がせむ深山の月はしたへども猶思ひおく露のふる郷」(拾遺愚草、中)などの他、ほとんど例を見ないが、ここは、「古」に掛けて、「降る」と言う。そこから続けて、「降る朝」に「古足駄」を掛ける。

◎月にむかひて雨気をよめり 六番語注「雨気をさへ詠ずる事、風情をうしなふにたり」参照。

◎哥合の故実なきにや 「故実」は、心得。(月に対して雨気を詠むとは、この作者は)歌合の心得がないのであろうか。傘張の歌であるから、雨氣の月以外に詠みようもないと思われるが、そういうことは承知の上で、戯れているのである。なお、六十二番右、巫の月の歌に対しても、「歌合には故実なきに似たり」と言う。

◎心詞よくかなへり 心と詞とがよく調和している、と言う。「右、心詞かなひて、姿あしくもなし」(太皇太后宮大進清輔歌合、二十七番判詞)、「左、心詞あひかなひて侍り」(治承三年右大臣兼家歌合、九番判詞)などの例がある。

◎かたはのつき 上句の「古足駄」から、「片齒」を導き、「かたはの月」と続ける。「片齒」は、足駄の齒が欠けて一枚だけになった状態である。時代は下るが、『職人尽狂歌合』の足駄造の歌に、「難波瀧あしだ造は時鳥かけたと鳴くをかたはかと聞く」と、芦の「片葉」と、足駄の「片齒」をかけた例がある。「かたはの月」もほとんど例のない言葉だが、「思へども命ながきは有明のかたはながらに世を尽くせとや」（雪玉集）に見るごとく、半月のことを言うのであろう。いづれにしても、この「かたはの月」は、一方では、「片割れ月」という雅語を連想させながら、他方で、不十分な状態、ないし不具の意の「片端」という俗語を連想させて、滑稽である。足駄の「片齒」に引き寄せて、「かたはの月」という奇抜な語をあえて用いたと見るべきであろう。なお、この月は、上句に「朝」とあるから、有明の月である。

◎木の間なりけり 木の間から漏れる有明月を詠んだ歌には、「山家にて有明の月を見て詠める 木の間漏る片割れ月のほのかにもたれか我が身を思ひ出づべき 〈行尊〉」（金葉集、九、雑部上）や、「山の端を出でても松の木の間より心づくしの有明の月 〈業清〉」（新古今集、十六、雑歌上）などがある。

◎みる心地す 「見る心地す」は、歌合判詞や歌論書で、「鳴く夕暮の浮き雲、やすらかに言ひ下されて、景気見る心地し侍れば」（建保二年内裏歌合、十九番判詞）、「うち聞くに面影浮かびて、さし向かひ見る心地するは、よくよめる歌の習ひなれば、何れの姿にも越えたるべし」（瑩玉集「おもかげある歌」の項）のように用いられている。俊成が判詞に用いた「見るやう」や、定家十体の「見様」とほぼ同じく、歌によまれた情景が目に見えるようだという意味であろう（武田元治「見様」考—定家十体の内—〈大妻国文11〉参照）。もっとも、この判詞が当を得ているかどうかは、例によって、必ずしも問題ではない。なお、本職人歌合三十一番銀細工の月の歌に対して、「見るやうに詠みたり」、四十九番放下の恋の歌に対して、「見るやう也」の判詞が見える。

◎いつしかに 「いつしかなり」の連体形。思いがけず時期が早いさまを言う。いつの間に。第三句の「隠れ」にかかる。早くも相手が自分から去って行った驚きを表す。

◎われにみえしと 私に会うまいと。

◎かくれかき 「我に見えじと隠れ」から「隠れ笠」と続く。「隠れ笠」は、被ると姿が見えなくなるという、想像上の笠。「隠れ蓑」などとともに、鬼の持つ宝物とされる。

◎さしもへたてぬこゝろなりしを 第三句の「隠れ笠」から「さし」を導き、「さしも隔てぬ」と続ける。私の方は、あれほどにも親しい気持ちでいたのに。

◎ひとりねの身はわれなれや 「〜(は)我なれや〜」の形は、「深山木の陰の小草は我なれや露しげけれど知る人もなき(伊勢)」(新勅撰集十二、恋二)のように、恋の歌の典型の一つ。普通、例に見るように、第一、二句に、自然物などを挙げ、それと同様我が身はしかじかの状態であると、四、五句で述べる。ただし、ここはそれとはやや異なり、我が身は、第三句「差し足駄」のごとく、第四、五句「二め三めもあればこそあれ」という状態だという。従って、「独り寝の身は我なれや」は、独り寝の身は、他でもないこの自分なのだからであろうか、という意味に解すべきであろう。なお、似た形の歌に、六十三番左、競馬組の恋の歌「老ひ馬の遅れはてたる我なれや取り付きがたき恋もするかな」がある。

◎さしあした 「差し足」は「差下駄」と同じく、差齒の足駄のことであろう。それに、忍び歩きの意の「差し足」を掛ける。「差し足」の「目」、および「差し足」で忍び会う「女(妻)」という、二重の意味で、枕詞的に、次の「二め三め」にかかる。

◎ふため三めもあればこそあれ 「め」は、足駄の鼻緒を通す穴の意の「目」と、「女(妻)」とを掛ける。足駄の目が二つということはあるが、ここは、「二目三目」と語調を調えたに過ぎない。「二女」は二人の女ないし妻。あるいは、二人目の女、と考えてもよからう。「三女」という言葉は、『蜻蛉日記』の「夏引きのいとことわりやふためみめよりありくまにほどのふるかも……ふためみめはげに少なくしてけり」という似た例の他、用例を見出しえないが、三人の女、または三人目の女と解することに問題はなからう。第三句からの続きで、足駄の目がいくつもあるように、差し足で忍び逢うべき二人目、三人目の女があるというならともかく、この歌は、「ひとり寝」、「二め」、「三め」と、数を並べて戯れている。

◎ゆうく 「悠々」か。歌合判詞の例は管見に入らぬが、『八雲口伝』に、俊頼の歌、「日暮るれば会ふ人もなしまさき散る峯の嵐の音ばかりして」を評して、「上手のしわざにていますこしゆうくときこゆ」とし、また一般に、「ゆうく」と読みながしつべき歌にも、物をいくらもいはむとすれば、あそこもこゝもひぢばりてわろき也」と言う。連歌の世界でも、『兼載雑談』に、「連歌は先づ心より詞をいうくといひくだして、幽玄にすべし。いかに心ばへふしありとも、ふしくれ立てば、連歌には聞ゆべからず候」などの例がある。のびのびとした、おおらかな詠みようを言うのであろう。

◎逸興あり 十番語注「逸興」参照。

◎第三句大事なるへきを 歌の第三句は特に大事であるとされたことを言う。

◎糸のあふら 「荏の油」で、荏胡麻の種子から採った油。『和漢三才図会』九十三に、「用_レ子_ヲ搾_リ油_ニ為_ス燈油_ト又引_テ傘挑燈雨衣等_ニ不_レ黻_ヲ而能_ク凌_グ雨_ヲ」(「荏」の項)とあるごとく、灯油の他、傘などの防水に用いられた。

◎目のゆかみたるから心地あしや 「目」は、吉田光邦『日本技術史研究』は、木目のことと解する(伝統、二、一、七十一番歌合「図私解」)が、これも、鼻緒を通す穴と見るべきであらう。「たるから」は、白石本は「たかる」、忠寄本は「たかる」の横に「たるから」と校合。「くたるから」ならば、「から」は、原因・理由を示す格助詞と見て、一文は、鼻緒の穴が歪んだ(ないし、歪んでいる)関係で、不満足だ、という意味に取るべきかと思われが、「たる」に「から」が接続する用例を、他に見出しえない。(「歐陽ヲ居士ト云ハ仏法ヲ信タカラ云ト云」(蒙求抄、四、三七ウ)や、近世の接続助詞化した用例では、「おや子のきうり切ましたから、若殿をおまへのお子と思召て下さんせ」(あみだが池新寺町)などのように、「た」に「から」が接続するのが普通)。「たるから」という言い方があったとしても、あまり普通ではなかったのではなからうか。誤写の可能性もある。白石本、忠寄本に「たかる」とするのも、「たるから」が解釈しにくかったことから生じた異文ではなからうか。もつとも、この「たかる」は、一層解釈しがたい。

【繪】

傘張は、烏帽子、直垂、袴姿に腰刀を差す。広げた傘の前に立ち、荏の油を塗つてるところか。足下にあるのは、油を入れる鉢か。右手に持つ小物が、油を塗る道具と思われるが、その名称、形状とも未考。

足駄作は、剃髪し、諸肌脱ぎで、袴を履く。炉の前に座して、左手で足駄の片方を捧げ、出来具合を点検する体。右手に、炉で熱した火箸様の物を持つ。これで、鼻緒の穴を開けるのであろう。炉の右にもう一方の足駄。左に、火箸様の物もう一本と足駄三足。足駄はいずれも、鼻緒を上げる前である。なお、一部の足駄の台に穴が多くあるように見えるが、これは、露卯の差し歯で、差し歯の柄が表面に出ているためである。炉の左の火箸様の物は、尊經閣本では、鑿のようにも見え、白石本、忠寄本では、明らかに鑿である。明暦板本は描き落とす。白石本、忠寄本は、足駄の数および描き方に小異がある。

【参考】

○ 里々に走りありけどつびもせず

堅木の足駄齒こそ強けれ

(竹馬狂吟集)

○ 夜乾しにするかや播磨唐傘を、菊尽しはのよい色の変わるに、染めはゑせひで夜明けて菊を散らいた、型の手柄を京紺搔で習うた、かちん前垂れ紺屋の嫁か娘か

(田植草紙)

○ へして、かたがたは秀句を御存じか。へ存じたと申す程な事ではおりなひが、さりながら、私はからかさを細工に致す。此のからかさに付いてならば、随分申さう。……へして、秀句はどちらからぞ。へしまから参つた。へ追つ付け秀句が聞きたひよ。へ骨折つて参つた。へ何と。へ小骨折つて申さう。へ秀句が聞きたひと言ふに。へつれづれに申さう。へそれまではゑ待つまひよ。へかみげでござる。へかみげとは何と。へゑ申すまひ。

(虎明本狂言、秀句傘)

○ いでいでさらばその古しへ、我がからかさを張りまわりし、ありさまかたり申さんと、御前にさしかかり、御前

にさしかかり、祐善がからかさ、祐善がからかさは、日本一の下手なりと、名を洩らし離れやすし、いやとて召す人なかりければ、あそこへさしかけ爰へさしかけ、お傘召されよ傘召されよと、叫べども呼ばわれ共、人は応へず春ながら、日傘もはやくたけ笠の、骨折れや腹立ちや、骨折れや腹立ちやとて、神氣のごとくに狂ひまはるはただ酔狂か、顔は朱傘の赤きは猿の山王祭か、咎もなき人に向かひて、さわらばひやせと悪口すれば、彼がかしらを割り撓めや、茶杓撓めにし轆轤を離せとありしかば、つるに命は奪いとりかさにて、地獄の底にすみかさなりしを、今会ひがたき御法をゑげ笠、弘誓の舟に半帆を上げて、はちすの花笠はすの葉笠を、さし張りて行くほどに、是ぞまことの極楽世界、これぞまことの極楽世界のあみ笠や、南無阿弥笠のほのかに見えてぞ失せにける

(天理本狂言、祐善)

○ヨーロッパでは、女性は、ヴァレンサ製の革もしくは金箔のハイヒールをはく。日本の女性は、漆塗りの、木製のハイヒール(下駄)をはく。それには親指と他の指とを別々に(さしこむ)。

(日本覚書、二)